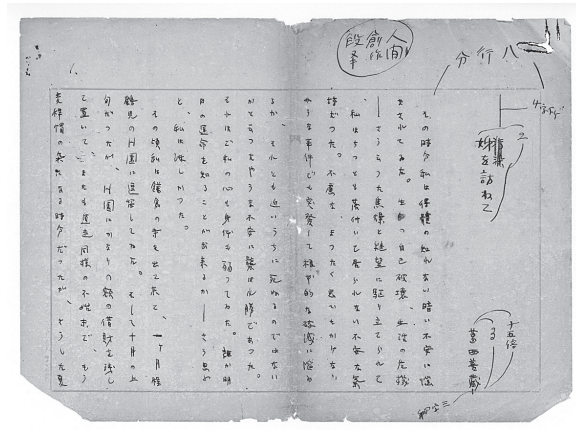


# 青森県近代文学館報

## 令和2年度特別展「中南津軽文学散歩」

会期 令和2年7月11日(土) ～ 9月22日(火・祝)



葛西善蔵 原稿「姉を訪ねて」(初公開)

青森県の南西部は、弘前市、黒石市、平川市、西目屋村、藤崎町、大鰐町、田舎館村の三市二町二村で構成され、中南津軽地域と呼ばれてきました。中南津軽地域の東方には八甲田連峰、西方には秀峰岩木山と白神山地、南には矢立峠など山々に囲まれており、県内で唯一海に接していない地域

です。白神山地に源を発する岩木川と、その支流の浅瀬石川、平川が津軽平野を潤して肥沃な土壌を形成し、本県を代表する穀倉地帯となっています。また、平野部周辺の丘陵地帯には、日本を代表するりんご園地が広がっています。

本展は、明治以降に中南津軽地域を描いた文学作品を紹介しながら、近代文学から見たこの地域の持つ魅力に迫るものです。

### 令和2年度企画展

#### □「ミステリーの魔術師

#### 高木彬光生誕100年展

会期 令和2年10月24日(土)

～令和3年1月11日(月・祝)

青森市に生まれた高木彬光は、「刺青殺人事件」が江戸川乱歩の眼にとま

り、ミステリー界にデビューしました。高木彬光の生誕100年にあたる今年、当館で収蔵している彬光の直筆資

### 目次

・令和2年度の予告	1
・特別展「詩人・一戸謙三」開催報告	2
・13人の書画展 開催報告	4
・今日出海展―直木賞受賞から70年―	5
開催報告	5
・作家×スポーツ展開催中、パネル展報告	6

料・図書雑誌、そして初公開となる彬光の旧蔵図書を展示し、ミステリーに新たな側面を持たせた高木彬光の業績と作品を紹介します。

#### □新谷ひろし氏寄贈資料展

会期 令和3年2月20日(土)

～5月16日(日)

俳誌「暖鳥」で活躍し、現在は俳誌「雪天」を主宰する俳人・新谷ひろし氏は、かつて青森に俳句の文学館を作りたいという夢を抱き、長年にわたり収集に取り組まれた方でもあります。新谷氏から寄贈された数多くの貴重な青森県俳句に関する資料を公開します。

#### ↳エクステンド常設展示

青森県近代文学館の常設展示作家たちからピックアップし、展示コーナーを拡大する「エクステンド常設展示」。令和2年5月29日(金)からは生誕120年を迎える石坂洋次郎、12月4日(金)からは、令和2年が没後10年に当たり令和3年に生誕90年を迎える三浦哲郎を取り上げる予定です。

・エクステンド常設展示「大宰治 改版・異装本の世界」報告、「寺山修司」開催中	7
・第18回青森県近代文学館川柳大会中止	8
・全国文学館協議会共同展示開催中	8
・日曜午後の朗読会報告	8
・資料寄贈者紹介	9
・館務日誌	12

木村友祐氏第162回芥川賞ノミネート  
呉勝浩氏 第162回直木賞ノミネート



撮影：小嶋 淑子



撮影：尾島 敦

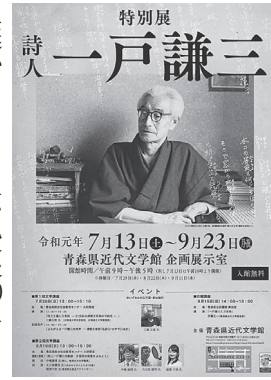
青森県八戸市生まれの作家・木村友祐さんが、「幼な子の聖戦」(「すばる」11月号)で、第162回芥川龍之介賞候補にノミネートされました。また、同じく八戸市生まれの作家・呉勝浩さんが、「スワン」(KADOKAWA)で、第162回直木三十五賞候補にノミネートされました。

当館ではお二人の特設コーナーを設置し、ノミネート作品と、平成30年夏に開催した「特別展 平成の青森文学」に際してご寄稿いただいたエッセイをパネルで展示しました。残念ながら今回お二人とも受賞はなりませんでしたが、これからもお二人のお仕事に注目し、応援していきたいと思っております。

# 「特別展 詩人・一戸謙三」開催報告

会期 令和元年7月13日(土)

～9月23日(月・祝)



生誕から120年、没後40年に当たり、県詩壇のリーダーとして長きにわたり活躍した一戸謙三の詩業を紹介しました。詩人・福士幸次郎の指導のもと青森県で初めての詩の結社であるパストラル詩社に参加し、疾風怒濤の青春を過ごした彼の詩作は、ヨーロッパで興ったモダニズムを吸収し、散文詩形式による伝統とモダンが結合した斬新な傑作へと結実します。それは同時に地元詩壇のプロレタリア派との対立をうみ、やがてモダニズムにも不毛を感じた謙三は、方言詩の世界にたどり着きます。その後、さらなる高みを求め定型詩の模索を始めますが、戦争へと向かう時代のうねりに飲み込まれていきます。



一戸謙三令孫、兎氏による開会式あいさつ

## 1 詩の産声(一八九九～一九一九年)

【詩集『太陽の子』との出会い】

一戸謙三は、明治32(一八九九)年、黒石町(現黒石市)に父・彦三郎、母・ふきの長男として生まれました。

彼を詩の道へと導いたのは、萩原朔太郎の口語詩、そして県立弘前中学校卒業後に読んだ、生涯の座右の書となる福士幸次郎の詩集『太陽の子』(大正3)への感動でした。

【パストラル詩社】

謙三は、大正7(一九一八)年、慶応義塾大学医学科予科に入学して上京しますが、夏休みの帰省時に、従来の短歌に飽き足らなくなっていた弘前の若き歌人・後藤健次から誘いを受け、自由詩結社の創設に参画します。中央詩壇で活躍していた福士幸次郎に指導を仰ぎ、弘前に青森県初の詩結社「パストラル詩社」が創設されました。詩社名の「パストラル(牧歌)」は謙三の命名によるものでした。9月には第一詩集『田園の秋』を刊行。謙三も若原純郎の名で「小曲二篇」を発表しています。パストラル詩社は、以後大正12年までに全7冊の詩集と3冊の雑誌を刊行しました。



右から第四詩集『光の芽』、第五詩集『雲間を洩るる光』、第六詩集『落葉する頃』

## 2 閉ざされたページ

(一九二〇～二二年)

【失意の帰郷】

医学科予科で二年の課程を終え、本科への進級が決まっていた謙三ですが、大正9(一九二〇)年3月、経済的理由から休学。帰郷して黒石町立黒石高等学校の代用教員となります。

【黒石での文学活動―「胎盤」】

黒石では、「黒石時事」「黒石新報」を創刊した叔父、長谷川忠蔵の紹介で、文学を愛好する天内浪史、北岡義端、鳴海完造、柴田久次郎らと親交を結び、やがて文芸誌「胎盤」が創刊されます。謙三は創刊号の編集から印刷所との交渉、表紙デザインまで担当しています。

【再上京、再帰郷】

大正11年1月、叔父の紹介で農商務省商務局商事課雇員(図書係)の職を得、謙三は再び上京しました。仕事を終えると仏語専門学校に通い、外国詩を訳し、詩を作り、小説を読みました。また、謙三を民俗学に導いた年下の畏友・齋藤吉彦との交流も始まりました。師・福士幸次郎宅への訪問もかない、「一生のうちでもまことに楽しい時」だったといえます。翌年には、新潮社の詩誌「日本詩人」3月号に一戸玲太郎の筆名で「追憶の頁―抒情詩(五篇)」が掲載、中央詩壇デビューを果たします。しかし、上京年の秋から患い始めた神経衰弱が回復せず、大正12年8月、農商務省を辞し、帰郷します。

## 3 地方主義の旗のもとに

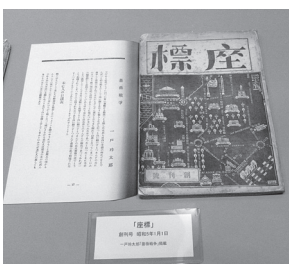
(一九三三～三三年)

【福士幸次郎の帰郷―地方主義運動】

大正12(一九二三)年9月の関東大震災で被災した福士幸次郎が帰郷し、「地方主義運動」を展開し始めました。これはフランスの作家モーリス・バレスの影響によるもので、中央集権の現状、西洋文化への安易な同化に異を唱えるものでした。謙三は、地元で開催された地方主義普及のための講演会、文学講習会に百田宗治、金子光晴らとともに講師として参加するなど、積極的に協力しました。

【超現実主義詩へ】

社会主義思想の広がりに伴い、詩壇ではプロレタリア詩運動が勢いを得ていた一方で、春山行夫らの「詩と詩論」を中心とする新詩精神運動が若い層に支持され始めていました。謙三は、この新しい動きに敏感に反応し、昭和5年、青森県内の文芸誌を統合した総合文芸誌「座標」が創刊されると、詩欄の編集委員を務めるとともに、斬新な超現実主義詩を次々と発表していきます。昭和7年には、百田宗治の誘いを受けて「椎の木」(第三次)に参加します。



「座標」創刊号(昭和5年) 一戸玲太郎(謙三)「薔薇戦争」掲載

4 津軽方言詩の開花 (一九三三〜三七年)

【超現実詩への行き詰まり】

「椎の木」同人となり中央詩壇に返り咲いた謙三でしたが、自我を前面に押し出す西欧由来の超現実詩に行き詰まりを感じようになります。柳田國男門下の畏友・齋藤吉彦によって導かれた民俗学の世界に踏み込んでいった結果、謙三は「日本古代精神への回帰」という道を見出します。地方に残る古の日本語である方言には、古代日本共同体の精神が保持されており、その方言で詩作をしようと謙三は考えました。それは凶らずも師・福士幸次郎が唱えた地方主義運動の一つである方言詩運動と重なるものでした。

【津軽エスプリ運動】

謙三は、昭和9年から翌年にかけて『津軽方言詩 茨の花』第一輯を皮切りに計五冊の謄写版『津軽方言詩集』を刊行します。謙三はこの刊行を、福士幸次郎の思想を引き継ぐ第二次地方主義文学運動と位置付け「津軽エスプリ運動」と名付けました。10年には、植木曜介、小枝九郎らと方言詩誌「芝生」を創刊。11年には『津軽方言詩集 ねぶた』を刊行しました。16年から『総合誌「月刊東奥」』で、謙三を選者とした方言詩の募集が始まり、多い月には百を超える応募があるなど方言詩運動は活況を見せました。



一戸玲太郎 (謙三) 『津軽方言詩集 ねぶた』 (昭和11年 十字堂書房)

5 詩の音楽性を求めて (一九三八〜五五年)

【定形詩試作―日本詩韻律の解明】

方言詩運動を展開した謙三は、やがて定型詩の創作に舵を切っていきます。「日本詩の伝統を西洋詩の理論から検討し、やがて西洋詩には全くない超個人主義精神を日本詩の過去に見し、それを基礎として日本詩を世界詩歌として樹立しよう」(『津軽方言詩の事』)と謙三は考えていました。昭和13年、佐藤一英が主宰する四行定型詩「聯」の同人となり、多くの聯詩、論稿を発表します。

【戦況の悪化】

しかし、戦争が激化するにつれ、聯詩社が戦争協力の色合いを濃くすると、16年3月をもって、謙三は作品を出すのをやめてしまいます。この後、終戦までの4年間、発表のあてのない身辺雑詩ばかりを書きました。18年、若者たちに請われ詩の結社「草原社」を結成、弘前市駅前通りの中弘青果統制組合事務室で、9月から毎週金曜の夜、日本近代詩の講座を開き、戦時下の愛国詩とは全くかけ離れた作品ばかりを講じました。しかし「草原社」は翌年1月に警察から解散を命じられます。

6 茨の花 (一九五六〜七九年)

【戦後刊行の詩集】

戦時中、解散命令を受けた「草原社」メンバーの小山路夫主宰「雪の社」から『一戸謙三詩抄 第一輯 追憶帖』(昭和22年)、『茨の花 一戸謙三詩抄

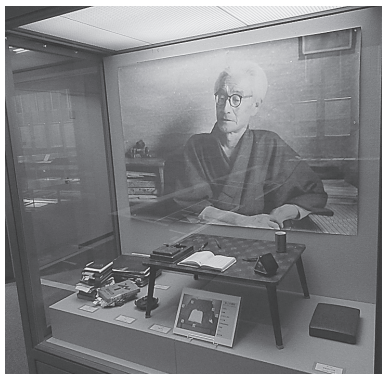
全一二冊の第二冊』(昭和24)を刊行。

また、昭和23年には、青森美術社から『歴年』を刊行。初期と後期のものを除いた方言詩に至るまでの作品を、詩作上の時期毎に選んだ詩集でした。34年、『連詩集 椿の宮』を蘭繁之の緑の笛豆本の会から刊行。蘭は「草原社」のメンバーでした。36年、圏詩社から『津軽方言詩集 百万遍』を刊行。41年には方言詩、「連」、訳詩を除いた『自撰一戸謙三詩集』を津軽書房から刊行。47年、緑の笛豆本の会から連詩集『現身』を刊行。

【茨の花】

「茨の花」『自撰 一戸謙三詩集』より

昭和54年10月1日、謙三は80年の生涯を閉じます。路傍に咲く茨の花に自らをたとえた謙三でしたが、謙三が生涯をかけて切り開いてきた詩の道を、今も多くの後輩たちが歩いています。総展示資料数は155点、会期中の来場者数は三二四九人でした。



謙三書齋をイメージした展示

第1回文学講座

令和元年7月28日(日)

青森県総合社会教育センター (参加者数67名)

講演「地方主義と方言詩―21世紀の津軽方言詩の可能性―」

工藤正廣氏(北海道大学名誉教授、北海道立文学館館長)

記録音声「よみがえる一戸謙三の肉声―津軽方言詩「弘前(シロサギ)」ほか」



工藤正廣氏

第2回文学講座

令和元年8月18日(日)

青森県総合社会教育センター (参加者数65名)

講演と朗読「詩人一戸謙三の軌跡 方言詩の前後をよみとく」

講演：中嶋康博氏(四季・コギト・詩集ホームページ) 管理人、岐阜女子大学職員)

朗読：大川原儀明氏(「あおもりボイスラボ」代表)・稲葉千秋氏(青森朝日放送アナウンサー)

日曜講座

令和元年9月15日(日)

青森県立図書館集会所 (参加者数30名)

「一戸謙三と方言詩」

講師：伊藤文一

(青森県近代文学館室長)

企画展「13人の書画展」開催報告

会期 平成31年2月23日(土)

〜令和元年5月19日(日)



2月23日(土)から5月19日(日)まで「13人の書画展」を開催しました。当館の収蔵資料には、作家の直筆の書画(書軸、短冊、色紙、スケッチ等)もありです。大型の書画は展示スペースの都合上、展示の機会が多くありません。そこで、常設展示室の13人の作家の書画の中で、これまで展示される機会が少なかったもの、新収蔵など展示されたことがないものを中心に展示することにしました。

収蔵資料の調査中、作家の書画の字の迫力に感動し、言葉の選び方や添えられる絵を楽しみました。お客様にも、先入観を持たずに、まず書画そのものを楽しんでいただきたいと考え、展示室では解説文や著書の展示をなくし、「書画」が主役になるように配置しました。



短冊、書軸、色紙、スケッチを種類別に展示しました。同じ種類の書画を見比べることで作家の個性を発見していただけたのではないかと思います。

【短冊】(18点)

秋田雨雀の短冊を展示しました。佐藤紅緑、福士幸次郎、石坂洋次郎、工藤与志男『青森県短歌俳句史』(津軽書房、昭和42)によれば、正岡子規は佐藤紅緑の俳句について「明治二十九年の俳句界」(『日本』所載、明治35年に子規の著書『俳句界四年間』に収録される)の中で、「普通の人ならば尋常の事として見逃すべき者をも紅緑は取って以て趣味ある詩料とせり。」と評価しているといわれています。紅緑が俳句を書いた短冊は春夏秋冬の順に並べて展示しました。



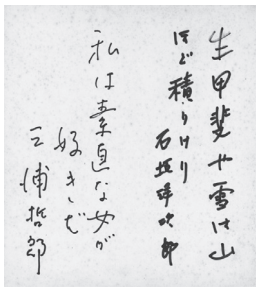
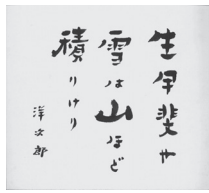
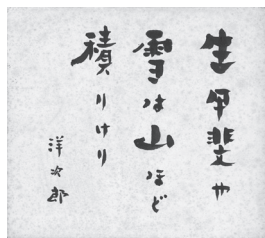
【書軸】(17点)

福士幸次郎、秋田雨雀、太宰治、葛西善蔵、佐藤紅緑、高木恭造の書軸を展示しました。秋田雨雀書軸「赤蜻蛉高く飛べと雨はれた」は初展示資料です。『秋田雨雀日記I』(未来社、昭和40)大正15年9月10日の記載に、雨。夕方晴れた。(中略)書を二三枚かいて(中略)おくれた。(中略)

(明日板留を去る。ひんやりと林檎の膚から秋が来た。夢を語るかけしの音の物悲し。赤蜻蛉高く飛べ飛べ雨はれた。)

【色紙】(62点)

秋田雨雀、高木恭造、寺山修司、北畠八穂、北村小松、今官一、石坂洋次郎、三浦哲郎、太宰治、福士幸次郎、長部日出雄の色紙を展示しました。11日に板留を離れています。



石坂洋次郎の色紙「生甲斐や雪は山ほど積りけり」に書かれた俳句は、随筆集『雑草園』(中央公論社、昭和14)所収の「冬景色」に見られます。「生甲斐や雪は山ほど積りけり」を書いた色紙は、三浦哲郎と一緒に書いたものを含めて8点ありましたのですべて並べて展示しました。送りがなもすべて一致しており、文字の異同がありませんでした。好んでこの句を書いていたことがわかります。

【スケッチ】(8点※うち2点複製)

秋田雨雀、北村小松のスケッチを展示しました。

収蔵書画のうち、展示できなかった書画については展示室内のディスプレイでご覧いただけるようにしました。また、書画に書かれた言葉が見られる作品・掲載誌、書画にまつわるエピソード等の調査結果は、資料にまとめてご自由にお持ちいただけるようにしました。資料を読んでいた後では、また違った見え方になったと思います。書画の由来、書画にまつわるエピソードにつきましては、今後も引き続き調査を進め、情報収集・整理に努めたいと思います。

80日間の会期中、三四二三名の方にご覧いただきました。5月12日(日)の日曜講座「書画にまつわるエトセトラ」には17名の方々に参加いただきました。

(武永佐知子、文学専門主査)

「今日出海展―直木賞受賞から70年―」開催報告

会期 令和元年10月26日(土)

〜令和2年1月13日(月)

令和元(二〇一九)年は、翻訳者・演出家・映画監督・小説家、さらには初代文化庁長官と、多才な活躍を見せた作家、今日出海の没後35年に当たりました。そして今年令和2年は、「天皇の帽子」による直木賞受賞から起算して70年という記念年です。

日出海は明治36(一九〇三)年、今武平と綾の三男として、函館で生まれました。従来の年譜には本県における在住歴を示す記述は見られません。ただ、当館では開館の頃から、日出海を青森県人と血縁関係のある「ゆかりの作家」の一人と位置づけ、資料収集の対象としてきました。

日出海の父・武平は弘前藩士の家に生まれ、東奥義塾から函館商船学校に進み、日本郵船の船長となった人物でした。一方、母・綾は、名医として知られ第8代弘前市長を務めた伊東重の妹であり、函館の遺愛女学校を卒業後は明治女学校で学んだ才媛でした。

後に日出海は長兄の東光と「バイタリティ和尚の秘密」という対談を行い、「おれたちの家は自由主義的だったな」という兄の言葉に、「強制はしないんだな。子供は子供でいい、ということころがあった」と応じています。

日出海は神戸で育ち、満14歳で上京し、官立浦和高等学校から東京帝国大

学へと進み、小林秀雄をはじめ多くの友を得ながら作家としての道を歩んで行きました。昭和6(一九三二)年に桂子夫人とともに鎌倉に移り住み、昭和12年にはフランスに遊学。戦時中は二度のフィリピン従軍を経験しました。

昭和25年の直木賞受賞後は小説の単行本を多く刊行し、国際的な映画祭で審査委員を務めることも少なくありませんでした。

こういった活動の多彩さは、今圓子氏著『人物書誌大系今日出海』を参考文献としたパネルと、吉田槩子氏よりご贈りいただいた日出海旧蔵の図書・雑誌によつて紹介することができました。

なお、日出海が最晩年に刊行した随想集『隻眼法楽帖』には津軽に関する思い出が少なからず登場します。「デング熱」の章では、子供のときは「津軽で夏休みを過ごしたことが屢々あった」と明かし、「狸と貉」の章では、子供の頃に「婆やたち」から聞かされた「津軽に伝わる色々な伝説や説話」の一つを披露しています。これら津軽にまつわる日出海の文章もパネル化して紹介しました。

当館蔵の草稿12点を含め総資料点数は175となり、二二一六人の方が足を運んでくださいました。11月17日には日曜講座「今日出海と津軽―父祖の地への思い―」を開催しました。本展のために齋藤重周氏が寄せてくださった文章を下に再掲します。

(竹浪直人、文学専門主幹)

今日出海展に寄せて

齋藤 重周

今日出海と長兄の今東光兄弟の両親は弘前出身であり、この二人の直木賞作家のルーツが弘前にあることを多くのひとに再認識して頂きたい。

兄弟の父武平は弘前市山下町の出で日本郵船の船長を務め、アフリカ大陸南端の希望峰を廻る航路を開拓した。印度哲学に傾聴し菜食主義をとり、クルミを常食にしクルミ船長と云われた。弘前に来たときは台所の賄いの者は大量のクルミを割るのが大変であったという。

今東光・今日出海は共に本名であり、ペンネームではない。父の船乗りとしての思いがそうさせたのだろう。

母あやは弘前市元長町津軽藩御典医の家系である伊東家久の末娘で、兄に伊東重がいる。

伊東重は医師であり、養生哲学を唱え、養生会を設立し、弘前市長・衆議院議員を務めた。小生の祖母(むつみ)が伊東重の長女で、東光・日出海とは従兄弟にあたる。伊東重は七十歳のとき娘婿の齋藤周蔵(小生の祖父)を伴い世界一周の旅に出、病を得て尊敬するナポレオンの国憧れの地フランスパリにて客死した。遺骨は武平の船で日本に帰っている。

あやの若い頃の思い出として、ネプタ喧嘩で刀傷を負った者と遭遇し大変怖かったと云っていた。

あやは東京に学び、和洋の詩歌に通じ、月夜の晩には平家物語を誦じ、またシェークスピアを原書で読み、東光の中学の英語の教科書を一読・暗記し東光に聴かせたという。弘前から見る久渡寺方面の山並を南の連山とよび、これを眺めることを好ん

だ。長く弘前に滞在し、戦時中小生と母が碇ヶ関に疎開した折にはどうしてもいい同行している。終戦後日出海宅・東光宅に起居した。このため両今家の中では津軽弁が通じ、日出海家では膝頭のことはカブで通用していた。

文藝春秋の講演会で東光・日出海が揃って弘前に来たとき、当時の市長・桜田清芽が自宅に招き入れた際の古風で純粹な津軽弁を日出海は正確に再現・発声してみせ語感の鋭さを感じた。また日出海は津軽弁にFの発音が残っていると慈しんだ。日出海は初代文化庁長官となりその折上京の時文部省を訪ね受付で郷里のものですと名乗るとフリーパスで長官室に通された。

東光が自宅にロドヴィコ・カラッチの大きな絵ダリウス一家を購入し、飾った。日出海に見せたところ、うむつと言ったきり口を噤んだという。

日出海長女の圓子は日本における図書館学の始祖である。三女槩子は、小生と年齢も近く、しばしば弘前に来て八甲田・岩木山の春スキーや鱒ヶ沢海水浴場に遊んだ。ここ近代文学館を訪ねた際、日出海直筆の原稿などが丁寧に保存・展示されていることに感謝していた。この縁で日出海所蔵の図書や雑誌等多数寄贈していただき、この日出海展開催に至った。昨年の急逝が悔やまれる。

今家の菩提寺は弘前市西茂森の正光寺であったが東光の手によって東京上野の寛永寺に移された。東光もここに眠りその墓碑には柴田鍊三郎による名文が刻まれている。日出海はクリスチャンで鎌倉に眠っている。(さいとう・しげかね、伊東重曾孫)

作家×スポーツ展・開催中

会期 令和2年2月22日(土)

～5月17日(日)



一九六四年、東京オリンピックが開催されました。東京オリンピックは、アジアで初めて開催されたオリンピックであり、スポーツ界のみならず、作家たちにも強いインパクトを与えました。二〇二〇年に開催される東京オリンピック・パラリンピックに先駆け、当館が所蔵する「作家とスポーツ」にまつわる資料」を展示しています。文学が好きな方は勿論、スポーツが好きな方にもぜひご覧いただきたいと思えます。

第1部 近代スポーツのはじまり  
溝口春翠、夏目漱石、太宰治らがどのように運動会を描いたか、「運動会」の変遷をパネルでご覧ください。  
第2部 スポーツに熱中した作家たち  
プレイヤーとして、観戦者として、スポーツに熱中した青森ゆかりの作家たちのエピソードを紹介します。

- ▽正岡子規×ベースボール
- ▽増田手古奈×野球
- ▽佐藤紅緑×野球
- ▽サトウハチロー×野球
- ▽宮川翠雨×水泳
- ▽三浦哲郎×バスケットボール
- ▽寺山修司×ボクシング&野球
- ▽石坂洋次郎×ゴルフ
- ▽川上健一×野球&ゴルフ

第3部 描かれるスポーツ  
青森ゆかりの作家たちのスポーツ作品、伝記、エッセイが掲載された著書や関連資料等を種目別に紹介します。

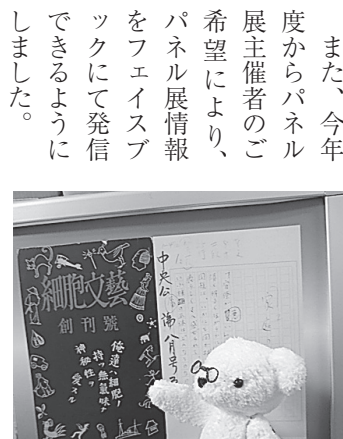
- ・陸上競技・野球・ボクシング
- ・バスケットボール・自転車
- ・柔道・ヨット・ボート
- ・ラグビー・登山・テニス
- ・ゴルフ・スキー・スケート
- ・アイスホッケー・カーリング

第4部 作家が見た東京五輪  
一九六四年に開催された東京オリンピックは「筆のオリンピック」と言われるほど、多くの作家らが、新聞・雑誌に寄稿しました。作家たちの観戦記をパネルで紹介しながら、東京オリンピック開催時の資料・記事を紹介いたします。

【関連イベント】※申込不要、無料  
日曜講座「作家×オリンピック」  
日時：令和2年5月10日(日)  
14時～15時  
場所：青森県立図書館4階集会室

パネル展 開催報告

新たに「太宰治没後70年」、「青森の文学者たちが描いた自然災害」、「詩人・一戸謙三」、「今官一生涯100年展」を製作しました。



新作パネル展も紹介しました。

パネル展の実施会場・開催期間は次のとおりです。

- ◇「陸羯南と正岡子規」  
青森県立美術館  
6月4日～6月8日
- ◇「太宰治没後70年―秘蔵資料大公開―」パネル展  
横浜町ふれあいセンター  
5月26日～6月27日
- 青森県立三沢高等学校  
7月12日～7月14日
- ◇「青森の文学者たちが描いた自然災害」パネル展  
青森県立青森西高等学校  
7月12日～7月13日
- ◇「太宰治生誕100年」パネル展  
青森県立三沢高等学校

7月12日～7月14日  
青森県立美術館  
7月27日～9月16日

◇「北村小松生誕110年展」パネル展  
青森県立八戸高等学校  
7月13日～7月14日

◇「作家と出会う」パネル展  
青森県立弘前中央高等学校  
7月12日～7月13日

◇「太宰治」パネル展  
青森県立北斗高等学校  
9月27日～10月16日

◇「今官一生涯100年展」パネル展  
青森県総合社会教育センター  
10月5日

◇「寺山修司没後30年」パネル展  
青森県立三沢商業高等学校  
10月5日～10月6日

◇「今官一生涯100年展」パネル展  
藤崎町ふれあいずむむ館  
1月18日、1月25日～2月23日



エクステンド常設展示  
「太宰治 改版・異装本の世界」開催報告

会期 令和元年5月31日(金)

～11月27日(水)

太宰治 改版・異装本の世界



令和元年5月31日(金)～11月27日(水)  
9:00～17:00 入場無料  
休館日: 6/27(木), 7/10(水), 7/25(木), 8/22(水),  
9/11(水), 9/26(水), 10/24(水), 11/13(水)

青森県近代文学館  
—エクステンド常設展示—

T030-0184 青森市荒川字藤戸 119-7 青森県立図書館2階 TEL:017-739-2575

平成27年度から回を重ねてきたエクステンド常設展示、シリーズ第9弾は「太宰治 改版・異装本の世界」というテーマで実施しました。当館では昨年度「太宰治没後70年―秘蔵資料大公開―」を開催し、生前の著作を中心に初版本約50冊を展示しましたが、その際には取り上げることができなかった非・初版本というものが実は多数存在します。

しかし、そういった、初版本とは何か異なる特徴を持った単行本群を的確に表せる既存の用語は、どうやら無いということが準備を進めるうちに見えてきました。そこで、非・初版本を表しつつ、展示のタイトルとしても存在感のある、重宝なフレーズを生み出すことができたという考えにたどり着きました。

はじめ「改版本の世界」というフレーズが思い浮かびましたが、表紙やカバーのみを作りかえた、中身的には再版な単行本は該当しないのではという

懸念が生まれました。そこに、装幀を異なるものにした本も含むというニュアンスを含めて誕生したのが「改版・異装本」というフレーズです。

最も顕著な例としては、昭和19年に刊行された初版本と昭和23年に刊行されたものとは、表紙の文字構成が左右逆になっている『津軽』（小山書店刊）が挙げられます。ポスターには、この2冊の表紙の写真を掲げましたが、展示では昭和22年に前田出版社から刊行された『津軽』（伊達河太郎装幀）も一緒に並べました。表紙には、雪の降る街をバックに言葉を交わし合っているかのような少年と少女の姿が描かれています。

また、筑摩書房から昭和22年に刊行された『ヴィヨンの妻』の初版本は、カバーに林芙美子による花の絵が載っていることが有名ですが、翌年再版された際には装幀は全く異なるものになりました。昭和23年1月発行のものでは大きな鎌を持った骸骨や人物がカバーに、同年10月発行のものでは何か植物の葉が表紙に、それぞれ描かれています。

これら当館で所蔵している太宰治の「改版・異装本」28冊を、初版本の複製版（日本近代文学館刊）14冊とともに展示し、ここに『八十八夜』初版本と『文藝雑誌』創刊号（太宰治「もの思ふ葦」掲載）を加え、総資料点数は44となりました。ご来場の方には「改版・異装本」の存在を通して、太宰文学が人々に受容されていく様子や世相を感じ取っていただけたのではないかと思います。

エクステンド常設展示  
「寺山修司 発想の源泉〜旧蔵図書から」開催中

会期 令和元年12月5日(木)

～令和2年5月24日(日)

「書を捨てよ」のフレーズで知られた寺山修司ですが、その評論・エッセイには、古今東西の実に多様な本が登場し、その膨大な読書量がしのげられません。既成概念を軽々と打ち砕き続けた寺山の発想の源泉であった旧蔵図書の一部を、今回、寺山の秘書だった田中未知氏の協力を得て公開しました。展示した資料中、図書は全て寺山が所蔵していたもの（田中未知氏所蔵）です。なお、会場では、田中未知氏監督の短篇映画『質問』も上映しています。



寺山修司  
発想の源泉  
～旧蔵図書から

令和元年12月5日(木)  
～令和2年5月24日(日)

青森県近代文学館



【寺山の「ニュースレター」】  
寺山が、ロンドンのジム・ヘインズとの真似をして始めたという、限られた

友人にだけ送った近況報告「ニュースレター」（当館所蔵）とともに、ジム・ヘインズの著書『HELLO, I LOVE YOU!』（1974年 Jean Lafitte Editions in association with Joy Publishing）を展示。また、昭和54年6月9日消印のニュースレターに、「今月買った本」として挙げられている『西條八十童謡全集』『バイロス画集』等を展示。

【『悪魔の辞典』・『説経節』】  
A・ピアス著 奥田俊介・倉本護・猪狩博訳『悪魔の辞典』（昭和48年3月15日5版創土社）、荒木繁・山本吉左右『説経節』（東洋文庫）（昭和48年11月10日 平凡社）を展示。寺山は『悪魔の辞典』の冷やかな調子に反発し、「少女のための恋愛辞典」を創作したといえます。また戯曲「身毒丸（しんとくまる）」は、中世の語り物「説経節（せつきょうぶし）」の「信徳丸」が大きなモチーフとなっています。

【『現代アメリカ文学全集13』への書き込みとメモ】  
寺山は読書の際、ノートを用いてメモをとり、本への書き込みはしなかったといえます。その中で珍しく書き込みのされている本が、ユージン・オニール、テネシー・ウィリアムズ、シドニー・キングスレーの作品を収めた『現代アメリカ文学全集13』でした。この本には、演劇の構想と思われる記述のある寺山専用原稿用紙一枚挟み込まれていました。

第18回青森県近代文学館川柳大会  
中止いたしました

青森県近代文学館川柳大会は、平成14年度の収蔵資料展「青森県の川柳誌」を機に開催された川柳大会が好評であったことにより、15年度以降も開催されてきました。今年度も、令和2年3月1日(日)に、青森県立図書館4階集会室を会場として実施すべく、昨年から準備を進めて参りました。

- 宿題と選者(各題二句詠)
- 「輪」 夏草ふぶき・成田我楽(共選)
- 「トラブル」 田中薫・長利冬道(共選)
- 「さらさら」 綿谷夕雨子・高森一吞(共選)
- 「握る」 潤子・山本弘志(共選)
- 席題一題(二句詠・共選)
- 「」 選者は当日発表

○ 講座「第20回かもしか大会『寺尾俊平批評吟』(1991年・音声資料)」  
しかしながら、新型コロナウイルスの感染拡大への対策が求められる中、諸般の事情を総合的に勘案し、令和2年2月26日(木)中止を決定いたしました。

本大会は、例年県内・県外から多くの方々にご参加いただき、5時間近くにわたって、熱い時間を過ごしていただいております。郵送等による投句などの代替策も検討しましたが、参加される方々の健康を第一に考え、中止することとなりました。

参加を予定されておりました皆様、参加を楽しみにされていた皆様、選者をお引き受けいただきました皆様、関係の皆様におかれましては、誠に申し訳ございませんでした。何卒御理解を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

全国文学館協議会共同展示  
「3.11文学館からのメッセージ」開催中

会期 令和2年2月28日(金) ~ 3月25日(水)



「関東大震災と葛西善蔵」

東日本大震災(平成23年3月11日)を契機として、鎮魂と慰謝を願う心から始まった全国文学館協議会の各館による協同展示も8回目となりました。当館では「関東大震災と葛西善蔵」というテーマで、パネル展示を行っています。

大正文壇で「芸術の苦行者」として注目された葛西善蔵(一八八七〜一九二八、弘前出身)は、大正12(一九二二)年の夏、ドイツ遊学を考えていました。同年9月1日の関東大震災により、居住していた鎌倉・建長寺内の宝珠院は倒壊し、洋行の夢は破れたものの、この翌年に善蔵は「椎の若葉」や「湖畔手記」といった珠玉の名作を生み出しています。  
右の2作を含め、関東大震災の影響が窺える善蔵作品計9編(作品名と初出については以下のとおり)をパネル化し、企画展示室前のロビーに掲げました。

「一種の寂寞とした感じ」

〔中央公論〕第38年第11号、大正12年10月1日発行

「迷信」

〔随筆〕第1巻第1号、大正12年11月10日発行

「蠢く者」

〔中央公論〕第39年第4号、大正13年4月1日発行

「落葉のやうに」

〔婦人公論〕第9年第6号、大正13年6月1日発行

「酔狸州七席七題」

〔中央公論〕第39年第7号、大正13年6月15日発行

「椎の若葉」※原題「椎樹の若葉」

〔改造〕第6巻第7号、大正13年7月1日発行

「湖畔手記」

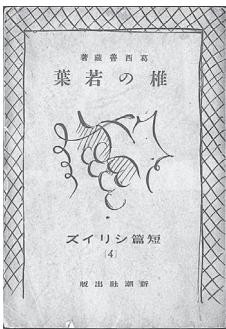
〔改造〕第6巻第11号、大正13年11月1日発行

「われと遊ぶ子」

〔中央公論〕第41年第1号、大正15年1月1日発行

「酔狂者の独白」

〔新潮〕第24年第1号、昭和2年1月1日発行



葛西善蔵『椎の若葉』(大正13年、新潮社)

日曜午後の朗読会報告

今年度の朗読会は全6回、のべ39名の方にご参加いただきました。「はじまり」のテーマで、2人の解説員が担当しました。

① 5月26日 ジュール・ヴェルヌ (北村小松訳)

② 6月23日 太宰治「思ひ出」 『八十日間世界一周』

③ 8月25日 福士幸次郎

④ 9月22日 秋田雨雀 『太陽の子』より

⑤ 10月27日 長部日出雄 『太陽と花園』より

⑥ 11月24日 今宮一 『壁の花』より



フェイスブック継続中

青森県近代文学館のフェイスブックでは、文学館に住む「くまきち」が、イベントや青森の作家・文学についてご紹介しています。

「青森県近代文学館 フェイスブック」で検索するとご覧いただけます。





## 資料寄贈者紹介

次の方々から資料を寄贈していただきました。誠にありがとうございます。今後とも当館へのご支援、ご協力を賜りますようお願いいたします。また、代表者の変更、住所変更等がございましたら、お手数ですが、ご連絡いただけたらと思います。

(敬称略・五十音順)

## 今期のご寄贈

(平成31年1月～令和元年12月)

- 忌 全国俳句大会作品集
- 岩波書店 『漱石全集』第二十三巻
- NPO 婆娑羅凡人舎 『第3回 浪岡バラ文学賞・作品集』
- 蝦名石蔵 『蝦名石蔵句集 旅信』
- 大阪府茨木市市民文化振興課 『川端康成青春文学賞入賞作品集』二冊
- 岡崎路辺 『秋田雨雀関係資料(伊東三郎遺品)二十九点』
- 小熊健 『我観』第六号
- 鹿島出版会 『子どものための建築と空間展』
- 神奈川近代文学館 『中島敦展』他図書二冊
- 鎌倉文学館 『オリンピックと文学』他図書一冊
- 鎌田慧 『삼포, 절망의 일면연극』
- 神谷直樹 『詩誌 六番目の母音』他雑誌二冊
- 河出書房新社 『文藝別冊 永遠の太宰治』
- 菊池寛記念館 『菊池家文書』他図書一冊
- 北九州市立自然史・歴史博物館 『九州発！棟方志功の旅』
- 北九州市立文学館 『詩人 宗左近』
- 北九州市立松本清張記念館 『松本清張『砂の器』展』
- 北村圭一 『北村小松スケッチブック [SKETCHBOOK]』
- 工藤正廣 『画稿「一戸謙三」弘前』
- お岩木山ね守らエで』他特殊資料四冊
- 窪田尚 『コロボーク』他図書一冊
- 薫風発行所 『薫風俳句 第七集』
- 群馬県立土屋文明記念文学館 『文学者の書』他図書三冊
- 国際日本文化研究センター 『吉田初三郎鳥瞰図へのいざない』
- 国民みらい出版 『現代短詩型文学作品集 よみびと 第三集』
- さいたま文学館 『絵本作家・飯野和好 おっと、とうげのなかまたちでい！』
- 佐久文学火映社 『佐久文学 火映』第26号
- 佐々木宏一 『エアツェレ』創刊号
- 佐々木靖章 『文藝運動』(5-19)
- 志賀道哉 『DVD「志賀直哉コレクション」協定書製本・追加製本』1. 18. (画像・目録など) (P.980) 『平成30登録第50号認証の証書』(公文書) (志賀直哉コレクション協定書等) 他CD二点
- 時事通信フォト 『国語活用資料集』
- 渋柿園俳句会 『渋柿園』第485号 他十一冊
- 白木佳乃 『アラベスク』
- 白鳥省吾記念館 『白鳥省吾賞20周年記念誌』
- 進め青函連絡船事務局 『進め！青函連絡船』Vol.1
- 仙台文学館 『井上ひさしの劇列車』
- 高木保 『ビデオ「浅草の灯」』他図書九冊
- 節のふるさと文化づくり協議会 『上のふるさと 第21回長塚節文学賞入選作品集』
- 高嶋進 『心を彫る 田川憲と棟方志功』
- 高田裕 『高田寄生木旧蔵資料十三点』
- 高橋玖未子 『呼ばれるまで』二冊
- たかなな発行所 『句集 北辰以後』二冊
- 鬻の会 『鬻』第73号 他図書一冊
- 田中良彦 『研究集録』第五十九号 他雑誌二冊
- 短歌結社 『草の会』 『平成三十年度歌会詠草集』『ローランサンの色』二冊
- 千葉芳醇 『既視感』二冊
- ちゅうでん教育振興財団 『夕焼け色のわすれもの』
- 調布市武者小路実篤記念館 『長興善郎と実篤』他図書一冊
- 土浦市立博物館 『町の記憶』
- 照井知二 『水晶』終刊号
- 藤樹社 『書道界』通巻352号
- 徳島県立文学書道館 『寂聴の少女小説』他図書二冊
- 豊島区文化商工部文化デザイン課 ミュージアム開設準備グループ 『暗がりから池袋を覗く』
- 長瀬博之 『千両文七捕物帳』全三巻
- 中原中也記念館 『富永太郎と中原中也』
- 仁科源一 『斜坑』第百二号 他雑誌四冊・図書二冊
- 西谷是空 『きじ鳩』通巻263号 他雑誌十一冊
- 日本歌人クラブ 『日本歌人クラブ 創立70周年記念誌』他図書一冊
- 日本近代文学会 『日本近代文学第100集別冊』
- 日本近代文学館 『太宰治 創作の舞台裏』
- 日本現代詩歌文学館 『平成の詩歌人たち』
- 青森県版画会 『青森版画』二冊
- 青森県民文化祭文芸コンクール実行委員会 『文芸コンクール入選作品集 2019』
- 青森市短歌連盟事務局 『青函交流短歌の三十年』二部
- 青森文芸出版 『成田千空伝』他図書二冊
- あしかげ社 『「蘆光」第221号 他雑誌一冊
- 尼崎市総合文化センター 『文芸作品集』平成三十年度
- 飯田知克 『俳句集 秋茄子Ⅲ』
- 石崎志亥 『四人俳句集 尾上・三戸・弘前』
- 一戸晃 『詩人 一戸謙三の軌跡 第十集』他一戸謙三関係資料八十六冊
- 一宮市博物館 『生誕120年記念 佐藤一英』展』
- 一茶記念館 『小林一茶百九十三回

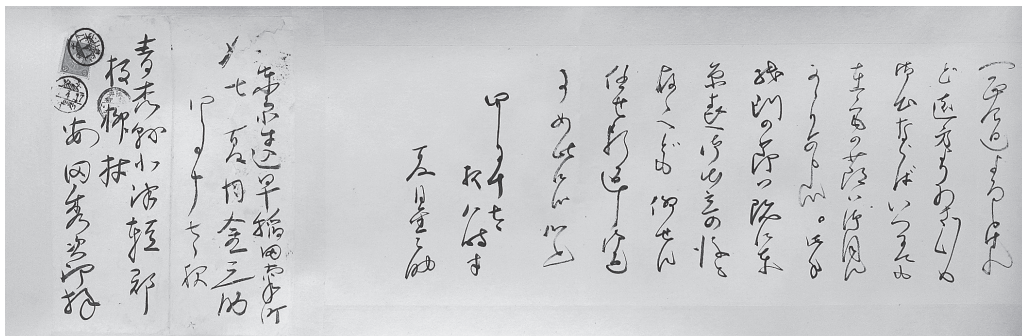
- 乳井昌史―「牧水研究」第二十二号
- 沼倉延幸―「図書頭森林太郎(鷗外)に関する基礎的研究」(抜刷)他二冊
- 野沢省悟―「ねぶた」(1-4)他雑誌十八冊・特殊資料三點
- 八戸市新美術館建設推進室―「八戸市新美術館整備ドキュメントブック 美術館のこれまで」
- はちのへ川柳社―「わくせん」二冊 他図書一冊
- 波止場の会―「波止場」107
- 葉名尻竜一―「寺山修司短歌の(登場人物二人説)を問ひ直す」
- パブリック・ブレイン―「Day Art」Vol.21
- 濱山哲也―「川柳作家ベストコレクション ショーン 濱山哲也」
- 原衆―寺山修司書簡一冊
- 弘前市立郷土文学館―「太宰治生誕110年記念展―太宰治と弘前」二冊
- 弘前潮音社―「歩みの記録」
- 深澤茂樹―「中村真一郎手帖」第十四号
- 福土光生―「伝統の時効」二冊
- ふくやま文学館―「井伏鱒二著「備前牛窓」
- 文化書房 博文社―「寺山修司研究」第十一号
- 文京区立森鷗外記念館―「鷗外と旅する日本」他図書一冊
- 北海道文学館―「北海道文学館から」他図書二冊
- 北海道立文学館―「極の誘ひ 詩人 吉田一穂」他図書三冊
- 米田省三―「和田市民栄誉賞授与式次第 他特殊資料二点」
- 前橋文学館―「接吻・中本道代」他図書二冊
- 松本修―太宰治・寺山修司関係情報資料一式
- 松山市立子規記念博物館―「子規・漱石・極堂生誕150年記念誌」他図書一冊
- 三浦康久―「三浦哲郎写真・フィルム等一式」
- 三鷹市山本有三記念館―「生命の冠 坂崎出羽守」
- 三田文学会―「三田文学」(98-138)
- 森英一―「イミタチオ」第60号
- 山川出版社―「全国作家記念館ガイド」
- 山崎一類―「鷗外」104号
- 山下敬子―「星の天蓋」二冊
- 山梨県立文学館―「宮沢賢治展」他図書一冊
- 山本祥吉―大町桂月「冬籠帖」
- 山本隆悦―「下北の文学・下北と文学」
- 吉田徳壽―「WA-IGU」No.68
- 吉村昭記念文学館―「吉村昭「海も暮れきる」
- リバイテイングザインスタジオ―「[Oona+]」第27444号
- 會津八一記念館―「雁魚來往(七)」
- 青嶺俳句会―「青嶺」
- 青森アララギ会―「青森アララギ」
- 青森県歌人懇話会―「青森県歌集」
- 青森県教育厚生会―「三潮」
- 青森県郷土作家研究会―「郷土作家研究」
- 青森県現代俳句協会―「青森県現代俳句年鑑」
- 青森県詩人連盟―「青森県詩集 青森」
- 青森県詩人連盟芸報 海峽」
- 青森県川柳連盟―「青森県川柳連盟だより」
- 青森県退職高等学校長会(やつき会)―「さつき会たより」
- 青森県長寿社会振興センター―「あすなろ倶楽部」
- 青森古今短歌会―「青森古今」
- あおもり草子編集部―「あおもり草子」
- 青森文芸出版―「会報『千空研究』」
- あおもり文芸ひろん」
- 青森ペンクラブ―「北の邊」
- 一戸恵多―「飾画」
- 井上康―「みちのく春秋」
- 井上靖記念文化財団―「伝書鳩」
- 井上靖研究会―「井上靖研究」
- 小笠原茂介―「第三次 [BRA]」
- おかしょうき川柳社―「おかしょうき」
- 大佛次郎記念館―「おさらぎ選書」
- 小田桐妙女―「俳句鼎 妙」
- 小山正見―「感泣亭秋報」
- 飾画の会―「飾画」
- 風詩社―詩誌「風」
- 金沢文化振興財団―「研究紀要」
- 「神津恭介ファンクラブ」事務局―「らんだの城通信」
- 北九州市立文学館―「北九州市立文学館紀要」
- 陸羯南会―「陸羯南会誌」
- 国原社―「国原」
- 黒艦隊―「俳句同人誌 黒艦隊」
- 薫風発行所―「薫風」
- 群馬県立土屋文明記念文学館―「群馬県立土屋文明記念文学館 紀要「風」」
- 勁草社―「勁草」
- 月刊弘前編集室―「月刊『弘前』」
- 国際芸術センター青森―「AC2」
- 越谷市立図書館―「野口富士男文庫 第二十一号」
- 五所川原俳句会―「五所川原俳句会会報」
- 小山弘明―「光太郎資料51」「光太郎資料52」
- 笹田かなえ―「川柳カモミール」
- さわらび短歌会―「さわらび」
- 此岸俳句会―俳誌「此岸」
- 清水雪江―「千青」
- 紫明の会―「紫明」
- 下北文化社―「下北文化」
- 渋柿園俳句会―「渋柿園」
- 詩霊の会―「詩誌 詩霊」
- 雪天俳句会―「雪天」
- 全国文学館協議会事務局―「全国文学館協議会紀要」
- 川柳「風の会」―「風紋」『第55回 青森市民文化祭川柳大会』
- 川柳触光舎―「触光」
- 川柳ゼミ 青い実の会―「青い実」
- 「青のメモリー」
- 川柳塔みちのく―「川柳塔みちのく」
- 川柳ひらなひ吟社―「川柳ひらなひ」
- 外海吟社―「外海」
- 泰斗舎―「あおもり芸術鑑賞友の会 情報誌 びーち」
- 高山市市民活動部生涯学習課―「高山市近代文学館調査・研究報告書」
- たかな発行所―「たかな」
- 潮音社―「潮音」
- 童子津軽句会―「津軽通信」

- 徳島県立文学書道館―「水脈」
- 十和田かばちえつほ川柳吟社―「川柳かばちえつほ」
- 中原中也記念館―『中原中也研究第二十四号』
- 成田本店―「青春と読書」『図書』「波」
- 新美南吉記念館―「研究紀要」
- 日本歌人クラブ―『2019年版現代万葉集』
- 日本近代文学館―「日本近代文学館年誌」
- 日本民主主義文学会弘前支部―「弘前民主文学」
- hashomado―「本のパーキング」
- はちのへ川柳社―「川柳うまつこ」
- 八甲田川柳社―「川柳八甲田」
- 波濤短歌会青森支部―「波濤青森」
- 帆風美術館―「風」
- 姫路文学館―「姫路文学館紀要」
- 弘前川柳社―「川柳『林檎』」
- 弘前大学国語国文学会―「弘前大学国語国文学」
- 弘前大学文芸部OB―「利宇古宇」
- 弘前文学学校―「文学いちば」
- 弘前文芸協会―「文藝弘前」
- 弘前ペンクラブ―「弘前ペンクラブニュース」
- 福田正夫詩の会―「焰」
- ふだん記津軽グループ―「ふだん記津軽」
- 文藝軌道の会―「文藝軌道」
- 北苑歌話会―「北苑」
- 北狄社―「北狄」
- 松丘保養園松桜会―「甲田の裾」
- 宮沢賢治学会イーハトーブセンター―「宮沢賢治研究Annual」
- 無名群社―「無名群」
- 村次郎の会―『風の軌跡 村次郎』通信」
- 森の座青森支部―「未来」
- 森の座発行所―「森の座」
- 山梨県立文学館―「資料と研究」
- 悠短歌会―「悠」
- 「樸」俳句会―「樸」
- 吉田徳壽―「八戸PEN」
- 《館報》
- 旭川文学資料友の会
- 池波正太郎記念文庫
- 石川近代文学館
- 石川啄木記念館
- 石坂洋次郎文学記念館
- 泉鏡花記念館
- 一茶記念館
- 井上靖記念館
- 岩手県立埋蔵文化財センター
- 江戸東京博物館
- 大阪国際児童文学振興財団
- 大島博光記念館
- 小川未明文学館
- かごしま近代文学館・メルヘン館
- 神奈川文学振興会
- 金沢文芸館
- 軽井沢高原文庫
- 北九州市立文学館
- 北九州市立松本清張記念館
- 虚子記念文学館
- くまもと文学・歴史館
- 高知県立文学館
- こおりやま文学の森資料館
- 高志の国文学館
- 斎藤茂吉記念館
- 坂の上の雲ミュージアム
- 佐藤春夫記念館
- 四季派学会
- 白鳥省吾研究会事務局
- 新宿区立漱石山房記念館
- 世田谷文学館
- せたがや文化財団
- 全国文学館協議会
- 仙台文学館
- 遅筆堂文庫
- 調布市武者小路実篤記念館
- 壺井栄文学館
- 藤村記念館
- 東北大学史料館
- 東北大学総合学術博物館
- 徳島県立文学書道館
- 中原中也記念館
- 日本近代文学館
- 日本現代詩歌文学館
- 俳人協会
- 俳人協会青森県支部
- 八戸市新美術館建設推進室
- 八戸市博物館
- 原阿佐緒記念館
- 姫路文学館
- 弘前市立郷土文学館
- 福井県ふるさと文学館
- 福岡市文学館
- 文京区立森鷗外記念館
- 文京ふるさと歴史館
- 北海道立文学館
- 松山市立子規記念博物館
- 三浦綾子記念文学館
- 三鷹市山本有三記念館
- 南相馬市植谷・島尾記念文学資料館
- 宮柊二記念館
- 室生犀星記念館

新収蔵資料

- 盛岡てがみ館
- 山梨県立文学館
- 吉川英治国民文化振興会
- 吉村昭記念文学館

安田秀次郎宛 夏目漱石書簡巻  
 (明治41年4月17日付) ※写真は後半部分



夏目漱石が北津軽郡板柳村在住の歌人・安田秀次郎(号は蛇莓)に書き送ったもの

館務日誌 平成31年・令和元年

エクステンド常設展示「追悼 長部日出雄」

12月6日～5月26日

1月6日 弘前中央高校(2名)見学

1月7日 朝日新聞社取材

1月20日 長部日出雄追悼朗読会(参加者37名)

出演・あおりボイスラボ

青森朝日放送取材

1月27日 長部真知子氏(長部日出雄夫人) 他

4名来館

1月29日 朝日新聞社取材

1月31日 吉田徳壽氏来館

2月15日 出前講座(事務職員協会東青支部冬

季研修会・竹浪 20名

2月19日 陸奥新報社取材

2月20日 東奥日報社取材

2月23日 「13人の書画展」開催(～5月19日)

3月1日 全国文学館協議会共同展示「青森の

文学者たちが描いた自然災害」開催

(～3月27日)

3月3日 第17回青森県近代文学館川柳大会開催

(参加者83名)

3月5日 読売新聞社取材

3月16日 出前講座(三鷹ネットワーク大学・伊

藤)24名

3月19日 和嶋延寿氏(青森県教育委員会教育

長)来館

3月24日 出前講座(野辺地町立図書館文学講

座・武水)16名

3月25日 NHK青森放送局取材

4月2日 青森ケーブルテレビ取材

4月7日 新潟日報社取材

4月11日 東奥日報社取材

5月7日 読売新聞社取材

5月12日 日曜講座 講師・武水(参加者17名)

5月16日 ツクイ青森金沢(25名)見学

5月22日 ツクイ青森金沢(20名)見学

5月25日 石井頼子氏(榎方志功孫)来館

5月28日 東奥日報社取材

5月31日 エクステンド常設展示「大宰治 改版

異装本の世界」開催(～11月27日)

青森朝日放送、東奥日報社、青森テ

レビ、毎日新聞社取材

6月4日 青森県近代文学館文学資料調査員会議

6月7日 青森大学社会学基礎演習(11名)見学

6月10日 青森市立泉川小学校(148名)見学

6月19日 NHK青森放送局取材

6月26日 出前講座(青森市中央寿大学・武水

48名

6月28日 北日本図書館大会参加者見学

7月3日 出前講座(青森中央学院大学公開連

続講座・伊藤)250名

7月4日 公立図書館等初任者(16名)見学

7月6日 陸奥新報社取材

7月9日 東奥日報社取材

7月11日 青森市立泉川小学校(7名)見学

7月13日 「特別展 詩人・一戸謙三」開催

(～9月23日)

(テープカット)一戸見氏・櫛引洋一氏・

西谷寿彦館長)

7月15日 青森朝日放送取材

7月17日 図書委員研究大会(74名)見学

7月23日 佃中学校(3名)、板柳子ども司書(9名)

見学

7月24日 五所川原市子ども司書(11名)見学

7月28日 第1回文学講座(参加者67名)

講演・工藤正廣氏

8月6日 青森南高校(2名)見学

8月15日 青森中央短期大学職場体験

8月17日 青森中央短期大学職場体験

8月18日 第2回文学講座(参加者65名)

講演・中嶋康博氏、朗読・大川原儀

明氏・稲葉千秋氏

青森中央短期大学職場体験

9月4日 青森市立西中学校(4名)見学、青森

中央高校(4名)職場体験

9月5日 青森商業高校(4名)職場体験

9月10日 読売新聞社取材

9月12日 高嶋進氏来館

9月15日 日曜講座 講師・伊藤(参加者31名)

NHK学園(38名)見学

9月19日 文学館評議委員会

9月22日 弘前南高校(26名)見学

9月28日 弘前学院大学国語国文学研究室

(16名)見学

10月8日 つがる市立稲垣小学校(32名)見学

10月16日 東奥日報社取材

10月19日 河北新報社取材

10月26日 「今日出海展―直木賞受賞から70年―

開催(～1月13日)

10月27日 吉田成志氏(今日出海孫)来館

11月1日 出前講座(横内寿大学・伊藤)30名

11月11日 読売新聞社取材

11月17日 今園子氏(今日出海長女)、吉田有紀

氏(今日出海孫)、齋藤重周氏(伊東

重曾孫)来館

日曜講座 講師・竹浪(参加者28名)

11月23日 朝日新聞社取材

11月29日 東奥日報社取材

12月5日 エクステンド常設展示「寺山修司

発想の源泉―旧蔵図書から」開催

(～5月24日)

デーリー東北新聞社、東奥日報社取材

12月7日 笹目浩之氏来館

12月10日 陸奥新報社取材

12月12日 河北新報社取材

12月15日 三八五バス旅行友の会(42名)見学

12月20日 東奥日報社取材

12月21日 三八五バス旅行友の会(37名)見学

12月22日 三八五バス旅行友の会(40名)見学

12月23日 三八五バス旅行友の会(31名)見学、

青森朝日放送取材

12月25日 三八五バス旅行友の会(21名)見学、

読売新聞社取材

12月28日 三八五バス旅行友の会(19名)見学



木村友祐氏・呉勝浩氏特設コーナー

青森県近代文学館報 第三十七号

発行日 令和二年三月十五日

編集発行 青森県近代文学館(青森県立図書館内)

〒030-0184 青森市荒川字藤戸一九七

電話 〇一七三九一五七五

http://www.plib.pref.aomori.jp/viewer/info.html?id=30